

目的 演者は従来主観的に行われていた被服製作技能（まつり縫い）を数量的に評価することを試みてきた。この過程で、縫目や縫目傾斜角度は年齢が上がるとともに短くなる傾向を示し、男子>女子となることがわかった。今回は、副次的調理操作の中で頻度が高くさらに技術を要する「切る」ことに着目し、包丁を用いた切断作業時に発生する音を数量的に評価した。

方法 ①被験者；大学生男女5名を対象とした。②方法；大根を長さ15cmの4つ割り（断面いちょう型）にし、三徳包丁（全長33cm，刃渡り20cm，重さ110g）とまな板（幅22.5cm，長さ44cm，厚さ3cm，重さ1280g）を用いて、切断作業を2回行った。そのときの発生音をマイクを通してテープに録音するとともに、作業時の動作をVTR撮影した。③評価方法；録音した音をコンピュータに取り込み、連続した10波形について時間間隔，周波数，強弱，音量の4項目から検討した。

結果 （1）時間間隔；4名の被験者はほぼ同じで約0.3秒だったが，1名は約0.9秒と長かった。（2）周波数；発生する周波数のうちその頻度が最も高いものを比較すると，（1）と同様に被験者4名はほぼ同じだったが，他の1名は周波数が2つに分かれた。（3）強弱；被験者3名はほぼ同じだったが，他の2名はそれより小さかった。（4）音量；（1）～（3）の結果から，比較的上手な者とそうでない者2名を選び比較したところ，音量は上手な者の方が大となった。（5）データのばらつき；（4）で比較した2名について，4項目の標準偏差を求めそれを図示したところ，四角形の面積は上手な者の方が小となった。